

# AR CA DIA

71  
SUMMER 2017

## Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



**OKAZAKI**  
**MINDSCAPE**  
**MUSEUM**

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽⑳ 家康の顔

館長 榊原悟

「家康の肖像と東照宮信仰」展（七月十七日まで）は、もうご覧になっただろうか。

家康公の画像がこんなに展観されたことは、かつてなかったはずだ。ここ岡崎で、と云う意味ではない。全国的にみても、そうである。絶後とは云わないにしても、空前の展示であることは間違いない。しかも今回の展覧会では、「家康像」に加えて二代秀忠から十五代慶喜まで歴代の「將軍像」も展示される。比較するのに絶好の機会だろうし、大樹寺には彼ら歴代の位牌が安置されている。その將軍の画像が、時空を超えて、父祖以来の地岡崎の、美術博物館で一堂に会する。まさしく岡崎で開かれるべくして開かれた展覧会、それがこの「家康の肖像と東照宮信仰」展である。昨年、家康公没後四〇〇年を記念する展覧会が当館はじめ全国各地で開催された。本展こそは、それら記念展の掉尾を飾る展示になるものと自負する。

その家康像と歴代將軍像、現存作品で見える限り、両者には大きな違いがあった。歴代將軍像が、ほとんどすべて遺像であるのに対し、家康像が必ずしもそれに律し切れるものではない点である。

歴代將軍は亡くなると木像と画像とが制作された。木像は靈屋おたまやに安置、画像は靈屋の在る増上寺か寛永寺に納められるのが常であった。それらは明治維新の混乱や空襲で失われたとみられる。しかし幸いにも徳川記念財団には、そうした画像の下絵・粉本類が多数伝えられている。おそらくこれらを原図もとに画像や、さらには木像が制作されたのだろう。それら下絵・粉本類のほとんどが將軍画像制作の任に当たった幕府御用絵師の家Ⅱ木挽町狩野家に伝来した事実が、この推定を裏付ける。明治十四年（一八八二）六月二十七日それらは一括して徳川宗家に上納されたもので、仲介の労を取ったのは、あの勝海舟であった（『海舟日記』同年同月日の条）。

興味深いのは、天保十二年（一八四二）完成された画像を見た將軍の感想

## ESSAY

である。十一代家斉（文恭院）の画像が出来ししゅら、寛永寺に納められる直前にこれを見た十二代家慶が、

至極宜奉似候

（狩野晴川院「公用日記」天保十二年六月二十九日の条）

と、大変よく似ていると感心したという。つまり息子家慶の眼から見て画像の面貌は、確かに父だと納得するだけの肖像性をもっていたのである。

むろんその点は、ひとり「文恭院画像」に留まるものではない。すべての歴代將軍画像には、似ていることが暗黙の裡うちに求められ、また実際に備わっていたとみてよいだろう。現に増上寺に埋葬された將軍の遺骨から推定される將軍の面貌は、その將軍画像に描かれた面貌と実によく一致すると云うではないか（鈴木尚著『骨は語る徳川將軍・大名家の人びと』東京大学出版会 一九八五年）。各画像の面貌の肖像性については、現代科学の眼の折紙付きと云ってよいだろう。

ではどうして、そこまで肖像性にこだわったのだろうか。と云えば、もうお分かりだろう。將軍画像はあくまで実人の肖像であるからだ。いや、それだけでは答えとして不十分で、さらにそれが遺像であることを、その理由に加えるべきだろう。

遺像であるならば、その画像は掛真かけまことである。祥月命日しやげつめいじつはもとより月命日や各種法会ほふえに掛けられるに違いない。像主の將軍を供養し、偲しのぶ手掛りになる。その像主が似てなければ、法会にもなるまい。

となると、やはり気になるのは、同じく実人の影でもあるはずの家康像の肖像性である。それと云うのも、現存する家康像を見る限り、同じ人物を描きながら同一人とは思えない程に、その面貌に違いが見られるからであ



図1 東照大権現像 愛知・長圓寺藏

る。歴代将軍画像が、ひとりの将軍につき複数数遣る場合でも、面貌についてはびたり一致するのと著しい対比を見せる。

なかで「東照大権現像」と「東照大権現霊夢像」と呼ばれる「家康像」が、それぞれ大きなグループをなし、それぞれ像容、面貌に違いを見せている。

そのうち前者(図1)こそは、わたしたちが今日「家康像」として第一に思い浮かべる画像で、遺品も多い。御簾が上がった宮殿内、家康は縹緗の上置に坐す。黒袍の束帯に身を包み、右手に笏、左腰に太刀を佩いた像容で一致する。前方、欄干の内阿・忬二匹の獅子が控える。面貌も太った丸顔に見開いた大きな目、太い鼻梁の鉤鼻、豊かな耳朶をもつ点で共通する。これらは別に「深秘の画像」とも呼ばれるように、神として崇められるべき「家康像」であった。その像容や面貌が、家康の神格化を推し進めた天海の図像的意味付けの結果であることは云うまでもない。筆者に木村了琢や神田宗庭など絵仏師の名が伝えられているのも、そのことを裏付ける。彼らならば天海の意を踏まえた図像を授けられ、知り得たはずだからだ。むろん、それに則って描かれた家康の面貌が、実人家康のそれから離れるのは当然だろう。

その点では後者(図2)も変わらない。別に「夢の画像」の名があるように、

## ESSAY

三代将軍家光の夢に現れた家康(東照大権現)の姿を描いたものが、これである。着衣も白や茶の紋服で、時に頭巾を被り、その多くが立て膝のくつろいだ姿になる。目も大きいことに変わりないが、「深秘の画像」とは自から異なる。つまりこれらはいくまで家光の眼を通じて見た家康の姿、面貌である。しかも祖父と孫とは云え、家光が家康と対面する機会はごくごく少なく、それも幼い頃に限られたはずだ。その幼少期のおぼろ気な記憶をもとに紡ぎ出した家康像こそが、家光の家康像である。実人としての客観的家康離れはこの場合も否定できない。しかも両者とも供養像ではない。そもそも実人としての肖似性を求める必要もない。

となると家康の実人としての真の姿、その面貌はどのようなもので、どの肖像に、それを求めることができるのだろうか。参州は岡崎の人ならば、誰もが気になる問題だろう。

結論から云えば、画像ではないものの、知恩院の『徳川家康坐像』(図3)こそが、それであろう。元和五年(一六一九)上洛した将軍秀忠は知恩院三門、経蔵などの建立を命じ、併せてすでに知恩院に安置されていた「家康束帯像」の例にならって自らの等身木像を造ることを思い立ち、京の大仏師康猶にその制作を命じた。像は元和六年四月十七日に完成。「家康束帯像」



図2 東照大権現霊夢像 狩野探幽筆 徳川記念財団藏

寿像で、もとより秀忠本人が自分の肖像として納得するだけの肖似性があつたことは言うまでもない。しかもその面貌は、すべての「秀忠像」の原図となった紙形(図5)のそれとも酷似する。知恩院『秀忠坐像』の面貌が、秀忠その人のそれを彷彿させることに、もはや疑いはあるまい。そしてこの事実はまた『家康坐像』の肖似性をも傍証するだろう。知恩院のこの木像の面貌こそ実人家康のそれであるとみる所以である。その面貌はもとより「深秘の画像」や「夢の画像」のそれとも異なる。だがそのがっしりと骨太い顔つきには、どこか三河の土の臭いさえ感じられるのだが。いや、康生町(岡崎の中心街)辺り<sup>あた</sup>でこんな男とひよいと出会いそうな気さえする。しかしそう思うのもわたしが三河の野に生まれ育った参州の人だからなのか。なお



図3 徳川家康坐像 京都・知恩院蔵

と共に「帝都鎮護之御影」として知恩院御影堂に安置された。現存する『徳川家康・秀忠坐像』(図3・4)こそが、この時の二像である。寺伝によればこの『家康坐像』は慶長八年(一六〇三)の制作とも云い、これについては、なお検討の余地があるようだが、この木像が、秀忠の眼から見て、父の像とするに十分な肖似性を備えていたことは間違いない。

一方、『秀忠坐像』は

## ESSAY



図5 徳川秀忠像(紙形)(部分)  
狩野探幽または狩野長信筆 徳川記念財団蔵



図4 徳川秀忠坐像 康猶作 京都・知恩院蔵

この木像制作に際しても紙形があつたはずである。いまはその紙形の出現を願うこととや切である。

企画展

# 歌川国芳 水滸伝の世界

菊地真央



図1《通俗水滸伝豪傑百八人之一個 九紋龍史進 跳澗虎陳達》個人蔵



図2《通俗水滸伝豪傑百八人之一人 花和尚魯知深初名魯達》個人蔵

俗水滸伝豪傑百八人之一個(壹人)シリーズです。本展では、多くの浮世絵師に画題とされた『水滸伝』の魅力、そして国芳が手がけた『水滸伝』を題材とした作品に焦点を当ててご紹介します。

『水滸伝』は、北宋(九六〇〜一二二七)末の混乱を舞台に、百八人の豪傑が集結し活躍する物語です。数百年間封じ込められていた百八の魔星

武者絵、風景画、美人画、戯画、と様々な分野で活躍した歌川国芳(寛政九〜文久元年(一七九七〜一八六二))は、現在では江戸後期の浮世絵界を代表する絵師として有名な人気絵師ですが、実は十代、二十代の頃は兄弟子の国貞(天明六〜元治元年(一七八六〜一八六四))の活躍がめざましく、その陰に隠れた不遇の時代を過ごしました。国芳が一躍脚光を浴びる契機となった作品が、『水滸伝』を題材にした《通

## EXHIBITION

が解き放たれる始まりの場面から、豪傑百八人が結集し官軍として活躍するも壊滅していくまでという壮大なストーリーは江戸の人々の間で熱狂的なブームとなりました。内容の一部が類似した物語が作られるだけでなく、内容に関連がなくてもタイトルに『水滸伝』と名を冠した水滸伝物が数多く作られる程でした。このブームに乗じて、文政十年(一八二七)、《通俗水滸伝豪傑百八人之二個(壹人)》が出版されます。本作は小説の登場人物を一人一人描くというそれまでにない画期的な構成で、画面一杯に豪傑のダイナミックな動き、氣迫に満ちた様相が表現されています。はじめに「智多星呉用」、「九紋龍史進・跳澗虎陳達」(図1)、「行者武松」、「黒旋風李達 一名李鉄牛」、「花和尚魯知深」(図2)の五図が出たとされており、爆発的なヒットとなりました。国芳は中国、日本の先行絵画を参考にしつつ、独自の工夫を随所に加えています。原作とは異なる場面設定、人物の衣服、手にする武器や肌の色にすることで、豪傑の個性をより魅力的に際立たせています。また、注目すべきは豪傑の肌

が解き放たれる始まりの場面から、豪傑百八人が結集し官軍として活躍するも壊滅していくまでという壮大なストーリーは江戸の人々の間で熱狂的なブームとなりました。内容の一部が類似した物語が作られるだけでなく、内容に関連がなくてもタイトルに『水滸伝』と名を冠した水滸伝物が数多く作られる程でした。このブームに乗じて、文政十年(一八二七)、《通俗水滸伝豪傑百八人之二個(壹人)》が出版されます。本作は小説の登場人物を一人一人描くというそれまでにない画期的な構成で、画面一杯に豪傑のダイナミックな動き、氣迫に満ちた様相が表現されています。はじめに「智多星呉用」、「九紋龍史進・跳澗虎陳達」(図1)、「行者武松」、「黒旋風李達 一名李鉄牛」、「花和尚魯知深」(図2)の五図が出たとされており、爆発的なヒットとなりました。国芳は中国、日本の先行絵画を参考にしつつ、独自の工夫を随所に加えています。原作とは異なる場面設定、人物の衣服、手にする武器や肌の色にすることで、豪傑の個性をより魅力的に際立たせています。また、注目すべきは豪傑の肌が描かれています。本作を機に、江戸庶民の間で色鮮やかな彫り物が流行し、国芳の絵を総身に彫る者もいたそうです。文政十年頃から天保七年(一八三六)にかけて随時出版され、現在七十四図が確認されています。国芳はこのシリーズの好評を得て、日本版水滸伝である《本朝水滸伝豪傑(剛勇)八百人一個》など、『水滸伝』の名を冠した様々な作品を制作しました。この様にバリエーションに富んだ『水滸伝』に材をとった作品は他の絵師によっても数多く制作されています。

本展では当館が寄託を受けている《通俗水滸伝豪傑百八人之二個(壹人)》七十四図(前期・後期で展示)の他、国芳や他の絵師が描いた『水滸伝』に関連する作品を展示いたします。浮世絵作品を通して『水滸伝』の日本における豊かな受容と広がり、そして国芳作品の魅力をご堪能ください。

会期：平成29年7月29日(土)〜9月10日(日)

特別企画展

ウェールズ国立美術館所蔵

# ターナーからモネへ 【上】

高見翔子



《難破後の朝》ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー 1840年頃  
ウェールズ国立美術館蔵 ©National Museum of Wales

英国・ウェールズ国立美術館は、一九〇七年に設立された世界有数のコレクションを擁する美術館です。今回は、約三十年ぶりに日本で公開される同館のコレクションから、約七〇点を越える作品を展覧いたします。

本展は、「ロマン主義」、「リアリズム」、「パリのサロンとロンドンのロイヤル・アカデミー」、「印象派」、「ポスト印象派とその後」の五章で構成します。また、風景画・肖像画・風俗画など、十九世紀のイギリスやフランスで活躍した画家たちの作品を中心に、英仏間の交流をめぐるヨーロッパ近代絵画の変遷を辿る内容となっています。

本展のタイトル「ターナーからモネへ」は、一八七〇―七一年の普仏戦争（プロイセン・フランス戦争）の際にロンドンへ逃れたモネやピサロが、とりわけターナーやコンスタブルの風景画に接し、感銘を受けたというエピソードを象徴しています。この出来事後、すでに一八六〇年代に反サロンの性格のグループ展の開催を構想していた、後に印象派と呼ばれる青年画家たちは、一八七四年にいわゆる「第一回印象派展」をパリで開催します。

## EXHIBITION

「ターナーからモネへ」に至るまで、主に風景画表現の変化を一度に概観できる点は、本展最大のみどころです。

ロマン主義からリアリズム、印象派、そしてポスト印象派とその後の展開を採り上げることで、西洋美術史における前衛として見られてきた絵画の変遷を紹介するだけではなく、「パリのサロンとロンドンのロイヤル・アカデミー」を章として紹介する部分も本展のみどころです。この章では、パリのサロンとロンドンのロイヤル・アカデミーで活躍した画家たちの作品をご紹介します。十九世紀中頃から後半にかけてのフランスでは、イタリ・アルネサンスに始まる古典主義的な絵画様式が主流となっていました。この絵画様式は、フランス政府主催の公募展である官展「サロン」で高い評価を受け、公的な注目を専有するなど、当時のフランス社会で承認を得ていました。「第一回印象派展」が開催される契機には、サロンにおいて落選した画家たちが、自由に作品を発表できる場を求めたという動きが挙げられます。サロンで落選した画家たちの作品を展示するという行為は、一八六三年にナポレオン三世の命令に

よって行われた「落選展」が始まりとされています。その後、一八七四年に無審査で出品可能な「第一回印象派展」が開催され、一八八四年のサロン・デ・サンデパンダン、いわゆる「独立派展」が開催されるという歴史を辿ります。サロンに落選し自由と独立を求めて行動を起こした印象派の画家たちと、サロンやアカデミーで活躍した画家たちの作品を、描き方の違いに着目するなど、対比するように観ていただくとより一層楽しんでいただけます。

また十九世紀フランスのナポレオン三世による都市整備は、科学技術の発展とも関連しており、したがって印象派の作品には、当時の人びともたらされた新たな生活環境がよく捉えられています。加えて、写真やチューブ入り絵具などの発明に挙げられる芸術と科学技術の関わりは、描く対象だけに留まらず、画家たちの制作スタイルにも変化をもたらしました。次号では、展示作品のご紹介とあわせて、十九世紀ヨーロッパの動向と絵画の関係についても触れたいと思います。

会期：平成29年9月23日(土・祝)～11月12日(日)

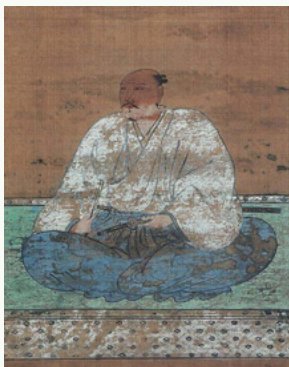
平成十七年度に当館では田中吉政展を開催した。この展覧会は田中吉政ゆかりの地の博物館である岡崎市美術博物館と、滋賀県の長浜城歴史博物館、福岡県の柳川古文書館の三館による共同企画展であった。田中吉政という戦国武将について、関連地域を結ぶことにより全体像、全貌を把握しようというものであった。田中吉政は近江に生まれ、

秀吉に取り立てられ、近江八幡城主豊臣秀次の家老、さらに岡崎城主二〇石大名、筑後柳川城主三三石大名に栄転する大名である。彼の一生を通観することにより評伝が書けるかもしれないの思いがあった。関連地域の共同企画により、今まで岡崎で把握しきれなかった田中吉政の岡崎時代の史料が近江にあることもわかった。たとえば、文禄二年(一九三)吉政の母が岡崎で死去した際に、近江の湯次誓願寺住職が焼香に呼ばれていることなど、三河岡崎と移ってからも近江時代の人々との交流があることも判明した。

田中は岡崎城下町造成や矢作川築堤など土木工事で知られるが、その技量は近江時代に近江八幡城の

堀割や城下町建設、筑後時代の柳川城と城下町の大改造、有明海沿岸の築堤にも発揮されている。通史的に概観することにより、比較することにより、鮮明に地域での事蹟の意味がわかってくるのである。展覧会の成果は図録に結集しているが、展覧会の担当者として同じ志で活動いただいた長浜の太田さん、柳川の田淵さんの尽力に感謝したい。

この視点・手法は江戸時代に転封となる譜代大名の展示でも有効であると考えるが、近世社会を切り開いた戦国武将、二人の人間の活躍がある戦国時代だからこそ意味があるのかもしれない。他館との共同企画は資料の集荷などの経費節減にもなるが、関連地域の情報収集において何にも替え難い成果を生むのである。



田中吉政像 長浜城歴史博物館蔵

## COLUMN & TOPIC

### 収蔵品紹介 | 指揮用鳶口

内藤高玲

収蔵庫内で自記温湿度計の用紙を交換していた時に面白いモノを見つけた。消防団で使用していた指揮用の鳶口である。担当者に確認したところ、かつては連尺消防団のものであったという。消防団という名称は聞きなれないかもしれないが、非常勤の消防組織であり、その成員は地元に住民によつて構成されている。当館では他にも消防団由来の民具を多く収蔵しているが、この指揮用鳶口のように直接消防活動には関係しないものも多くあり、使い方のわからないものもある。この指揮用鳶口もその中の一つであったが、かつて自分が消防団に所属していたことから使用方法がわかった。階梯操作の時に使用するのである。今では市域でも岩津地区にしか伝承されていないが、階梯操作(いわゆるはしご乗りのこと)の時に階梯の指揮をとる階梯長が階梯の横に立ち、「階梯、前「階梯、後」と前後の指示を出す。その時の使用する鳶口なのである。実用のためだけではなく、出初式などのハレの場で使用することから、各部の部品には、メッキの痕が残されている。

この鳶口も火消し道具の多分に

漏れず、江戸時代から大まかな形は変わっていないようで、他の事例を調べても「江戸時代」と表記されているものもある。火消しの道具はその発祥から現在にいたるまで、住民自治によつて担われていたことから、あまり形態と用途が変わっていない。

本稿で紹介した指揮用の鳶口も江戸時代には別の用途で使用されていたかもしれないが、現在使用されている形態は異なる。民具はかつて使用されていた状況を確認できれば一番であるが、その時に使用されている状況を確認することも重要なことだと思われる。

この鳶口を見ながら、そんなことを考えていた。



指揮用鳶口

# INFORMATION

## ■平成29年度特別企画展

### 家康の肖像と東照宮信仰

6月3日(土)～7月17日(月・祝)

□講演会(当館1階セミナールームにて)

「大樹寺東照大権現坐像をめぐって」

日時:7月8日(土)午後2時～

講師:塩澤寛樹氏(群馬県立女子大学教授)

## ■平成29年度企画展

### 歌川国芳 水滸伝の世界

7月29日(土)～9月10日(日)

前期 7月29日(土)～8月13日(日)

後期 8月15日(火)～9月10日(日)

会期中、一部展示替えがあります。

□講演会(当館1階セミナールームにて)

「武者絵のスーパースター 歌川国芳」

8月20日(日)午後2時～

講師:日野原健司氏(太田記念美術館首席学芸員)

□展示説明会(当館1階展示室にて)

8月6日(日)、8月26日(土)、9月2日(土)

いずれも午後2時～

美術博物館家康公四百年祭講演録「三河時代の家康を考える」好評販売中!

内容/徳川家康没後四百年記念の行事として平成27年に開催した、講演会「三河時代の家康を考える」全6回にわたる記録。家康が岡崎に生まれ、三河を統一、遠州計略に乗り出すまでの30年間、三河時代の家康について、家康や同時代研究の第一人者が様々な角度から語る。

価格/1000円(税込) 編集・発行/岡崎市美術博物館 体裁/四六版、上製、カバー装、200頁 頒布方法/美術博物館、文化振興課(福祉会館5階)、三河武士のやかた家康館で販売。※郵送による申し込みは美術博物館へ問い合わせを。

## 不如帰去

初夏を迎えた美術博物館での、日々のさやかな愉しみは「ほととぎす」。三英傑の方々には何だか申し訳ないけれど、今の時期「美博なら」いつでも鳴いている「ほととぎす」。

美博のある中央総合公園は、野鳥の宝庫だ。探鳥会もちよくちよく開催されている。ツバメたちは軒のあちこちに巣をかけ、ウグイスやコジュケイも盛んに囀っているけれど、「ほととぎす」の声はまた格別だ。恩賜池の向こうからその声が響くたび、パソコンを打つ手が止まり、私の全身は耳になる。

花の名前をたくさん知っている人に憧れる。無条件に尊敬してしまう。山歩きに誘われて出掛けると、グループの中にたいいそという人がいて、少しずつ花や鳥の名前を教わってきた。まだ若かった頃のハナシだけれど、ずっと気になっていた「とてもイイ声で鳴く鳥」が、万葉の昔から数多くの和歌に詠まれてきたあの「ほととぎす」だと教えてもらったときは、甚く感動したことを今も憶えている。そんな「ほととぎす」が、こんなふうには日常の一部になろうとは思ってもみなかったけれど。

どうか皆さんも美博にお越しの際は、展覧会だけでなく「目には青葉 山ほととぎす ユアテール」五感を駆使してお楽しみあれ!(鈴)

## おしゃべり、あれこれ。

### 父が繋いでくれた縁

先月は亡き父の誕生日でした。八年前のことですが、もう随分昔のことのように感じます。

大変厳格な父を少し避けるように生活していた私ですが、亡くなつて初めて気が付いたことーそれは、私が好きなものは殆ど、父から受け継いでいるということでした。数学、水泳、クラシック音楽等々。クラシック音楽については、父がピアノを弾いている姿を、今でも鮮明に思い出すことができます。そして私もピアノを習い始めると、父は私を美術館に連れて行くようになりました。当時はその理由を知る由もありませんでしたが、美術館は私にとっても居心地の良い空間になりました。

その後、私は乳飲み子を抱えて数年滞独することになるのですが、望んだ生活とはいえ、初めてだらけの緊張の毎日の中で、言葉を越えた「音楽と絵画」の大きな力にどれほど癒されたことか、計り知れません。私が思うにドイツでは、教会に通う延長線上で美術館を訪れる家族が多く、日本よりももう少し身近な存在である気がします。しかしまだ幼かった息子は残念ながら、当時のことは殆ど覚えていないようなのですが・・・

子どもたちが成人した現在では、私は一人でクラシック音楽や絵画を鑑賞することが多いのですが、いつも亡き父が傍らに在るような気がして、魂が共に震えるのを感じます。(林)

編集後記 | 暑い季節になりました。先月、当館にミュージアムショップYAGURAがオープンしました。これでやっとお客様からご要望の多かったミュージアムショップとレストランが久々に揃うことになりました。展覧会と併せて、レストランの美味しい食事、店長こだわりの品々にもご注目ください。どちらもいづれアルカディアで特集いたしますのでどうぞお楽しみに。(菊地)

表紙図版:東照大権現霊夢像(部分) 狩野探幽筆 徳川記念財団蔵



開館時間 午前10時～午後5時  
※最終の入場は閉館時間の30分前まで  
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)  
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第71号 2017年7月発行  
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)  
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内  
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA